

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|-------|-------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教育学 ） | 氏名 | 長谷川 諒 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 | | | |
| <p style="text-align: center;">1950年代～1970年代における米国音楽教育界の諸相 —「教育の現代化」と美的教育思想をめぐる音楽教育改革の実際—</p> | | | |
| 論文審査担当者 | | | |
| 主 査 | 教授 | 三村 真弓 | |
| 審査委員 | 教授 | 深澤 清治 | |
| 審査委員 | 教授 | 丸山 恭司 | |
| 審査委員 | 教授 | 枝川 一也 | |
| 〔論文審査の要旨〕 | | | |
| <p>本論文は、1950年代から1970年代にかけて実施された、米国の音楽教育改革を対象とする歴史研究である。具体的には、現代音楽作曲家と学校教育現場を架橋した The Contemporary Music Project（以下、CMP）、当時教育界を席卷していた学問中心主義を音楽科において体現した The Manhattanville Music Curriculum Program（以下、MMCP）、そして、美的教育思想の観点から音楽教育の必然性を正当化したベネット・リーマーに着目し、この3者が有する史的意義と今日的意義を指摘する内容を有した研究である。</p> <p>本論文は、序章及び第Ⅰ部から第Ⅲ部、そして終章で構成される。序章では、本研究に関わる問題意識と研究の目的、先行研究の概要が述べられている。</p> <p>第Ⅰ部では、CMPの活動史に沿って、その史的意義が論じられている。CMPは、若手作曲家の経済支援に端を発するプロジェクトであったが、結果的に、教師教育や新たな音楽能力観の提示、そして大学の教育課程改革等、広範な教育活動を行うこととなった。そして、これらの活動は、その表面的な多様性とは裏腹に、音楽の構造に客観的な視点を有する音楽家としての立場で音楽と関わることに教育的価値を見いだしていた点で一貫していた。CMPは、音楽教育学研究の中では Comprehensive Musicianship という斬新な音楽能力観によってのみ取り沙汰される傾向にあったが、本論文では、その活動の基盤にある哲学的一貫性が強調されている。</p> <p>第Ⅱ部では、MMCPが作成したカリキュラムの構造に内在する音楽教育史的意義が論じられている。MMCPのカリキュラムの中でも最も有名なものは、Synthesis と呼ばれる長期的なカリキュラムである。Synthesis は、あらゆる音楽に通底するキー概念の理解を目的にした、学問中心主義的性質の色濃いカリキュラムとしてこれまでも注目を集めてきたものであったが、本論文では、そのような概念の理解が、演奏行為、創作行為といった学習主体の行動によって獲得される点が強調されている。つまり、MMCPにとっての概念とは、座学的に理解され得るものではなく、経験的に体得される知識であったのである。そのような概念理解観は、これまで注目されることのなかった Synthesis 以外の4つのカリキュラムの性質からも、妥当に導かれるものであった。</p> <p>第Ⅲ部では、ベネット・リーマーの思想と具体的カリキュラムの性質が、合わせて論じ</p> | | | |

られている。ここでは、当時のリーマーの思想を知る手掛かりとして彼の博士論文が取り挙げられていることに加え、その思想に基づくカリキュラムも検討されており、彼の思想とその教育の具体が比較される形で論考が進められている。リーマーは、彼の博士論文とカリキュラムにおいて、音楽を「現示的シンボル」と見なす立場をとった。彼にとっての音楽とは、感情表現でも風景の描写でもなく、人間の生への洞察を非言語的にシンボライズした音響なのである。そしてそのような性質を正しく享受する音楽経験は、質的に宗教的であることをリーマーは指摘する。つまり、リーマーにとって、音楽の必然性とは宗教の不可欠性にも通じるものであった。しかし、リーマーの具体的カリキュラムは、そのような経験それ自体の提供というよりも、そのような経験を可能にし得る音楽構造の聴取力の育成に傾倒したものであり、本論文は、リーマーの思想の実際的側面を評価している。

これらを総括し、終章では、それまでの教育界で暗黙のうちに採用されていた西洋音楽を中心とする音楽観をこの3者がそれぞれの方法で拡張したことが指摘されている。CMPは、西洋音楽を中心に据えた点で従来の音楽観を踏襲するものであるが、そこに現代音楽を導入することによって、より広い視野から西洋音楽を捉え直した。MMCPは、音楽を音響にまで一般化することにより、それまで特定のジャンルに縛られていた音楽観を、音それ自体を目的的に取り扱う音楽観へと昇華させた。そしてリーマーは、音楽や音から一旦離れ、人間にとっての意味という視点から音楽を捉えることで、シンボルという音楽観をカリキュラムに体现した。本論文は、3者の音楽観は、まさに音楽それ自体の性質に対する洞察によって構築されていたと結論づけている。さらに、音楽観の拡大とそれに伴う多様な「構造理解」の在り方に、当代の教育改革の史的意義を見いだしている。

本論文は、以下の点において高く評価できる。

第1に、CMP、MMCP、リーマーという音楽教育史上著名な3者を研究対象にしつつも、それぞれにおいて斬新な論考が展開されている点である。これまで、CMPがComprehensive Musicianship以外の切り口から体系的に論じられることはなかったし、MMCPのカリキュラムに概念理解以外の特質が備わっていることは指摘されてこなかった。リーマーの思想とカリキュラムについても、彼の初期の思想を「現示的シンボル」という視点と実際のカリキュラムの両者から検討するというのは本論文独自の論理展開である。何より、この3者を体系的に連関させて、「教育の現代化」と美的教育思想という2側面から捉える試みは画期的なものである。著者の洞察に満ちた研究の着眼点と、それを可能にする音楽教育学的論考は、本論の重要な価値であると言える。

第2に、そのような音楽教育史研究としての成果が、現代の音楽教育に対する示唆として効果的にまとめられている点である。本論文の終章では、当代の教育改革を批判的に捉える今日の音楽教育哲学者デヴィッド・エリオットの論を反批判的に克服することで、3者の史的意義に今日的な価値を持たせる試みがなされていた。また、そこから導かれた音楽教育観を、我が国の慣例的な感動指向型の音楽教育実践と比較することで、音楽教育現場における感動経験の在り方を論理的に捉え直そうとしている点も評価できる。客観的な歴史研究と実際的な問題意識を有意義に接続させている点も、本論文の価値を高めている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成27年2月19日